

日本古代農業土木の歩み—日本書紀、続日本紀、日本後紀の記述から紐解く—

国際情報農学研究室 田中義人
指導教員 溝口勝

1. 背景

現在、日本では基幹的農業従事者の減少と高齢化が深刻化している。本当にこのままでいいのだろうか。日本人にとって農業はその程度のものなのだろうか。このような現状であるからこそ、私は今一度日本農業の原点を探る必要があるのではないかと考えている。稲作を中心とした日本農業がどのように発展してきたのかについて農業土木の切り口から振り返る必要がある。

2. 目的

本研究は農業土木の平安時代以前の記紀の記述に注目して日本農業の原点を探ることを目的とした。

3. 方法

(1) 文献調査

日本書紀 30 巻、続日本紀 40 巻、日本後紀 13 巻 (桓武天皇まで) の計 83 巻に及ぶ文献調査を実施した。その中で溝、池、堤などの農業土木とその他の農業関連事項の記述を抜き出して表を作成し、時代ごとにキーワードの頻出件数を数えた。(表 1)

(2) データベースの作成

表を CSV 形式に変換し農業土木に関する記述検索システムを作成した。これらを研究室サーバでインターネットに公開した。

4. 結果

データベースから日本古代農業土木に関して以下の点が明らかになった。

- (1) 溝と池の記述は弥生時代末期から古墳時代前期にかけて初めて現れた。溝の原文表記に見られた様態を示す漢字は溝瀆、渠、溝沘、渠川だった。
- (2) 工事時期に注目すると、溝、池、堤の築造から修築に変わる分岐点は奈良時代にあった。特にこの時代に堤の工事が日本各地で大規模に実施された。
- (3) メンテナンス：茨田堤の築造、決壊、修築の循環とその最初の周期が 467 年だった。



図 1 日本書紀の中の農業土木に関する記述検索システム

http://www.iai.ga.a.u-tokyo.ac.jp/y_tanaka/search/tanaka.ht

